

# KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

第68号 平成23年7月20日

編集・発行 神戸市立中央図書館

〒650-0017神戸市中央区楠町7-2-1 (078)371-3351



## 神戸新能

(上田能楽堂提供)

### 神戸新能

八月初めに長田神社で行われる「神戸新能」。昭和四十四年から、ほぼ毎年開催されています。

新能とは本来、興福寺の修二会に付随する冬の神事で、平安中期頃に始まりました。宗教行事としてではなく夏の風物詩として広く催されるようになったのは、昭和二十五年の平安神宮新能以降のことです。

神戸新能は、観世流能楽師の上田照也氏により企画されました。氏の父である上田隆一氏は、芸道を極めると同時に能の普及に優れた手腕を発揮し、「能楽師にしておくのは惜しい」と評される事業家でもありました。その遺志を照也氏は継ぎ、神戸能楽友の会の創始、百回を超える学校鑑賞能での演能など、愛好者の底辺を広げる事業を行いました。新能も「とにかく一度見てくれれば」という思いで務めたそうです。

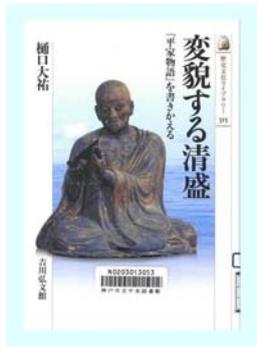
能というと堅いイメージがありますが、夏の宵、野外で見ると独特の趣があります。篝火の下、夜空や木々を背景に、時折吹く風に涼みながらのんびりと鑑賞できそうです。新能はこの長田神社のほかに、生田神社などでも例年行われています。

**変貌する清盛 — 『平家物語』を書きかえる** 樋口大祐 (吉川弘文館)

「おごる平家は久しからず」。犯した悪行の因果により滅んだ人物とされる平清盛。だが、『平家物語』に描かれる清盛は、決して悪人としてばかり扱われているわけではない。では、平氏の悪役としてのイメージは、勝者源氏によって作られたのだろうか。

清盛が生涯をかけて建設に取り組んだ大輪田泊(兵庫津)は、交易の場として繁栄した。清盛は、当時の貴族の常識ではタブーである外国人商人との接触を行うなど、新しい価値観を持った人物でもあった。

後世の人々が、清盛の「悪行」をどう読みかえてきたのか。同時代の『玉葉』『愚管抄』から国定教科書、吉川英治らの現代小説まで、作られた清盛像の変遷をたどっている。



**チャールズ・ホームの日本旅行記 — 日本美術愛好家の見た明治** チャールズ・ホーム (彩流社)

イギリス人チャールズ・ホームは、美術工芸品を扱う貿易商で、神戸と横浜にホーム商会を開き、西洋に日本美術を積極的に紹介した人物である。

一八八九年に京都や奈良、有馬温泉などを訪れた際の日記である本書の日本人の描写は面白く、日常生活を感性豊かに記述している。そこには、美術商としてではなく、日本という異文化を理解しようとする深いまなざしが感じとれる。

**神戸・阪神間の古代史** 坂江渉編著 (神戸新聞総合出版センター)

神戸には開港後の歴史しかなく、それ以前は何もなかったとの考えがあるが、本当だろうか。

畿内の西端に位置している神戸は、古代から日本の中心への玄関口としての役割を担ってきた。現在に続く国際都市としての特徴は、実は遙か昔から既に決まっていたのかもしれない。

本書は伝承や神話、神社の祭祀なども使って自由な発想から新たな歴史像を探り出している。

**有馬温泉百人一首 (かるた) — 豊かな歴史と自然に彩られた有馬温泉を詠いあげた珠玉の百首** 有馬温泉百人一首選考委員会ほか (有馬ふれあいのまちづくり協議会 [有馬文庫])

有馬温泉は、『日本書紀』以来、多くの記録や文学に描かれており、和歌にも多く詠まれている。本かるたは、有馬温泉ゆかりの和歌二千首のなかから、地元住民らを選び出した百首を用いて作られた。美しい切り絵で作られた情景豊かな絵札は、歌のイメージをふくらませてくれる。また、作者や解説などを載せた冊子が併せて制作されているので、どんな歌が選ばれたのか手早く知りたい方、歌の意味も同時に楽しみたい方にはこちらも便利である。



**意志道拓** 長谷川穂積 (ベストセラーズ)

十度の防衛に成功している(本書出版時点)ボクシングWBCバンタム級チャンピオン、長谷川穂積の半生を綴った自伝。

元ボクサーの父との厳しい練習のエピソードや、心強い相談相手である夫人との出会い、ボクシング経験が少ないながらもトレーナーに就任し、現所属ジム会長でもある山下氏との練習風景などが綴られる。

**不良ボランティアが社会を変える — 村井雅清還暦記念講演録** 村井雅清 (村井雅清還暦プロジェクト実行委員会)

村井氏は被災地NGO協働センター代表。国内外の災害支援活動に取り組み、「最後の一人まで」「十人十色、一人十色」「なんでもありや」を追求してきた。

「不良ボランティア」とは画一化されていないボランティア。阪神・淡路大震災では自主的に柔軟で多彩な活動を展開し、被災者一人一人に寄り添って行動した。大震災での彼らの活動とその意義が熱く語られている。

災害がほんとうに襲った時—阪神淡  
路大震災50日間の記録 中井久夫  
(みず書房)

本書は、阪神・淡路大震災当時、  
神戸大学病院精神科教授であった  
著者の救援活動の記録と、三月十  
一日に起きた東日本大震災の所見  
をまとめたものである。

医療ボランティアは「その場に  
いてくれること」に意義があると  
著者は言う。待機していることが  
多くても、予備軍がいてこそ現場  
は余力を残さず動けるからだ。

また、被災者でありながら救援  
活動を行う者へのこのころのケアの  
必要性など、体験に裏打ちされた  
救援活動についての考察や提言を  
随所に見出すことができる。

続編の「復興の道なかばで—阪  
神淡路大震災一年の記録」(みず  
書房)との併読をお薦めする。



神戸街角ものがたり—スケッチ紀行  
安田泰幸(神戸新聞総合出版セン  
ター)

ハガキにスケッチを続けて三十  
年以上という著者が、水彩画と  
エッセイで魅力ある神戸の街を案  
内する。自分が出会ったものの印  
象を描きとめ、切手やスタンプで  
カラージュされたスケッチは、お  
しゃれで写真以上に心に残る。

「新しい歩み」の章では震災後  
の神戸の様子も記録されており、  
失われた建築物や街が再生してい  
く様子も描かれている。

銅像受難の近代 平瀬礼太(吉川弘  
文館)

大倉山公園に台座が残る伊藤博  
文の銅像。一九〇四年に湊川神社  
境内に建立されてからこの姿に至  
るまでに何が起きたのか。

姫路市立美術館学芸員である著  
者は、ときに滑稽であきれるよう  
な、近代以降のさまざまな銅像の  
運命をたどりながら、受難の背景  
を探り、今も増産されつづける銅  
像とは何かを問いかける。

巻末に「銅像写真集 生き残っ  
た銅像、失われた銅像」六十二点  
を収録する。

|| その他の新刊 ||

むつりむつちゃん 高橋睦世著・  
発行  
嘉納治五郎—気概と行動の教育者  
生誕150周年記念出版委員会編  
(筑波大学出版会)

海運王山下亀三郎—山下汽船創業者  
の不屈の生涯 青山淳平(光人社)  
明日へ繋ぐ—挑み続けて30年 藤  
浪芳子(昭和精機株式会社)  
神戸—中蹴球史(復刻版) 河本春  
男(ユーハイム体育・スポーツ振興  
会)

書庫探訪 その24

『神戸古今対照地図』 大正4年(1915)

大正4年(1915)当時の神戸市  
域の地図に、神社仏閣や古い書物  
に登場する地名などが113ヶ所記さ  
れています。作製したのは、明治  
37年(1904)に創設された「神戸  
市教育会」という学校教育を支援  
する団体です。主な事業は、神戸  
市の教育発展に関する各種問題の



調査研究、講習会・講演会の開催、書籍の発行などでした。

「生田之森」「楠碑」といった、この地図で取り上げられている史跡を説  
明した『神戸古今対照地図説明書』もあります。それによると、神戸には史  
跡が豊富にあるけれどもそれを説明するものがなく、また時とともに史跡が  
次第に消滅していくことを憂い、郷土の歴史を学ぶ補助教材の1つとして作  
製することになったようです。また、歴史地図の編集は時間を要するもの  
で、急速に完成させるものではないけれども、この地図を社会に紹介するの  
が急務のため、仮製地図を公にすることとし、「大方の批正を仰ぎて他日の  
完成を期せんとす」とあります。

神戸とマラソン

神戸には、「日本で初めて」といわれているものがあるといわれ、スポーツの分野では、ゴルフやサッカー、そしてマラソンがあります。

明治四十二年（一九〇九）三月二十一日、日本で初めて「マラソン」という名称を使った大会が行われました。大阪毎日新聞社が主催した神戸・大阪間の「マラソン大競争」です。コースは、湊川埋め立て地をスタートし、大阪の西成大橋までの三十一・七キロメートルでした。

大会は、青年の体育を奨励する目的があり、飛脚や車引きといった日常脚力を使う職業についている場合は参加できませんでした。また、もう一つの目的が、将来欧米でのマラソンに出場できる選手の養成ということで、申込書に長距離の経験と自信を記す必要がありました。

年齢資格は、当初、二十歳以上三十歳未満でしたが、二十歳以下の希望者が多かったため、医師や専門家と協議した結果、十八歳以上三十歳

未満に変更されました。

参加申し込みは、全国各地から四〇八人に上りました。募集は二十人でしたので、あまりの多さに、まず書類審査を行うことになりました。条件を満たしていた申込者は、一四四人。その中から、体格試験に合格した一二人で、三月十四日に予選が行われました。

会場となった鳴尾競馬場には、約六万人の観衆が詰めかけました。予選は、競馬場を十周したタイムで競い、二十人の出場選手が決まりました。



大会当日のスタート直後

好天に恵まれた大会当日。午前十一時三十分、当時の神戸市長水上浩躬が短剣で選手の前に張られた紅白のテープを切り、スタートしました。ゴールまでの沿道には、観衆が途切れることなく連なっていたそうです。

優勝したのは、岡山県在郷軍人の金子長之助選手です。御影付近で、わらじの緒が切れるアクシデントがありました。脱ぎ捨て走り続け、タイムは二時間十分五十四秒、二着を五分近くも引き離してのゴールでした。優勝者には、三百円の賞金のほか、金時計や銀屏風などの豪華な賞品が贈られました。

それから約一〇〇年。マラソンは、「よく見るスポーツ」や「行っているスポーツ」のアンケートでは上位に入る馴染みのあるスポーツとなっています。

また、二〇〇七年の第一回東京マラソン以来、「都市マラソン」と呼ばれるものも盛り上がっています。発祥の地神戸でも、今年十一月二十日に、第一回神戸マラソンが開催されます。

コースは、神戸市役所前をスタートし、明石海峡大橋袂（県立舞子公園付近）を折り返し、神戸大橋を渡って、ポートアイランドの市民広場付近がゴールです。海沿いを走るコースのそばには、南京町や鉄人28号のモニUMENTといった観光名所があり、神戸ならではの景色が楽しめる魅力からか、七万七千人を超え

る申し込みがありました。

神戸マラソンは、「阪神・淡路大震災からの復興を支えていただいた国内外の人々や地域へ感謝の気持ちを込めて」ということから、大会テーマとして「感謝と友情」を掲げています。また、国内外の被災地を支援する「神戸マラソンフレンドシップバンク」を設立し、今年度は、



日本マラソン発祥の地記念碑

東日本大震災で被災された方々に対して支援をすることによって、今年四月、

スタート地点となる神戸市役所前に「日本マラソン発祥の地」の記念碑が設置され除幕式が行われました。ここから、また新しい神戸とマラソンの歴史が始まります。

参考図書

『兵庫県体育スポーツのあゆみ』（兵庫県教育委員会）

『明治期における神戸の健脚競走に関する史的研究』 棚田眞輔（交友プランニングセンター） ほか